

在宅看護における「語り」に関する文献検討

Study of “Narrative” at Home Care : Literature Review

福良 薫*

Kaoru Fukura

概要

在宅看護において訪問看護師が体験する内容を分析するために「語り」に関する文献検討を行なった。文献の抽出方法は、医学中央雑誌 Web Ver.5 を使用し、期間を限定せずに「語り」と「在宅看護」または「訪問看護師」をキーワードに含むものとした。分析方法は、抽出された文献を研究目的、研究方法（研究対象／デザイン／調査内容）、結果、考察を整理し、その動向を分析した。その結果、訪問看護師が体験する実践内容や専門性の獲得については、ほとんど研究されていないのが現状であり、今後在宅療養や家族のありようが多様な終末期や精神看護の分野のみならず慢性疾患や小児の在宅療養者などの幅広い分野において、その実態を明らかにする研究の必要性が示唆された。

1. はじめに

平成4年(1992年)に老人訪問看護制度が始まり老人訪問看護ステーションが設立されて以来、平成6年(1994年)には健康保険法等の改定、平成12年(2000年)の介護保険制度の導入など保険制度が次々に変わり、訪問看護利用者は増大した⁽¹⁾。さらに、現在国の方向は膨れ上がる医療費の削減という方向を打ち出しており、在宅療養を推進するために訪問看護の必要性はますます重要となっている。

一方、看護基礎教育において国はコミュニティケアの担い手として、在宅看護領域の看護専門職者の育成をめざし、平成9年(1997年)度よりカリキュラムに在宅看護領域を必修科目として位置付けた。さらに平成21年(2009年)の新カリキュラムにおいては統合分野の中に在宅看護論が位置づけられ、現在では在宅看護実習2単位の修得が指定規則として運用されている⁽²⁾。しかし在宅での看護が、成人看護学や老年看護学と異なり、知識体系の「学」としてではなく「論」として位置づけられた理由の一つに、学問体系として未発達の分野であると考えられている背景がある。つまり、在宅看護がこのように社会的期待が高まる一方で、専門教育者・研究者が少なく、系統だった知識体系が未確立であり、実践教育の専門職者間の合意がないのが現状だから

である。

在宅での看護はその場に居合わせる看護師は自分一人であるため、その一挙一動が利用者や家族に影響を与えることとなる。また、医師やケースワーカーなど他職種との連携や調整も必要不可欠である。すなわち看護を提供する環境がその家庭の物理的環境や価値観など、その場その場で大きく異なるところに在宅看護の難しさがある。こうした現場の中で熟練と言われる訪問看護師がどのようにして利用者のニーズを把握し、その個性に応じた在宅療養を支える看護を展開できるようになったのであろうか。彼らは多くの経験の中で対応の仕方を培い、専門性を成長させてきたと推測される。しかし先に在宅看護が学問体系として確立していないことに触れたが、教育として学生にこうした在宅における看護の在り方を教授するには第3者がこの営みを客観的に明らかにし理論づける必要がある。

こうした利用者の住居内で行われる活動を可視化する手段として、在宅看護の現状を看護師や利用者の「語り」という手法で研究している文献を整理し今後の課題を検討したので報告する。

* 北海道科学大学保健医療学部看護学科

2. 方法

1) データ収集方法

データベースは医学中央雑誌 WEB 版 Version5 を用いて 2017 年 4 月の時点で「訪問看護師」「在宅看護」「語り」をキーワードに原著論文を指定して期間を限定せずに文献検索を行った。43 件の文献が該当したが、そのうち看護学生や保健師あるいは外来看護師が対象者となっているものや、訪問看護ステーション起業に関するものなど本研究の目的に合致しない論文を除外し、さらにその内容を精読した結果、在宅看護の現状を明らかにしようという目的の論文 34 件を対象論文とした。

2) データ分析方法

34 件の対象論文について発表年ごとに単純集計を行いその動向を分析した。研究内容については、研究テーマ、研究対象者、研究領域および対象疾患、研究手法、研究の概要を整理し、これまでの傾向と課題を分析した。

3) 倫理的配慮

対象となる全文の収集から分析にあたっては論文著者が用いている言葉をそのまま引用し、論文の主旨や意図を損なうことのないよう取り扱った。

3. 結果

1) 対象論文の年次推移

対象論文は 2005 年から出現しはじめ、2007 年以降 2~4 件で推移しており 2013 年のみ 7 件と最も多く発表されていた(図 1)。

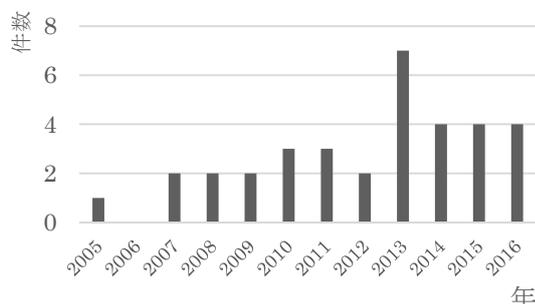


図1 対象論文の年次推移

2) 研究対象者

研究対象者は在宅看護のありようを明らかにするために看護師・利用者の両方となっている場合もあったが、どちらに焦点が当たっているのかによって整理すると利用者または患者 16 件、訪問看護師 13 件、遺族 5 件であった。

3) 対象文献のデータ収集方法

対象文献におけるデータ収集方法は多い順に半構成面接法 19 件、経過記録やカンファレンスの記録など記録物 5 件、非構成面接 5 件、ナラティブなかわりの逐語 3 件、既存のスケール 2 件、その他自由記載のアンケート、参加観察がそれぞれ 1 件であった。また、これらは複数の手法を組み合わせている場合もあった。

4) 対象領域と内容(表 1 参照)

対象論文で取り上げられていた領域または対象疾患については多いものから順に、がん終末期(グリーフケア含む) 11 件、精神疾患または精神障害 10 件、要介護高齢者 2 件、その他の慢性疾患(腎疾患、ALS、心疾患、呼吸器疾患、認知症、脳卒中) 6 件、東日本大震災の被災者 1 件、山村地域 1 件であった。また、対象領域を特定せず、看護師の判断根拠や専門性の獲得など看護実践あるいは看護師の成長に焦点を当てた文献は 3 件であった。

がん終末期に関する領域では、がん患者自身による在宅での病の体験や遺族に対し在宅で家族を看取った体験の「語り」から訪問看護師の役割を検討した研究や看護師を対象として看取りを支えた看護実践の「語り」や多職種との連携のありようを質的に分析していた。精神疾患または精神障害の領域では経過記録から地域で暮らす利用者の自己決定の支援や地域の中での生活の継続のありようを質的に明らかにしたものが報告されていた。また、支援の方法としてナラティブなかわりが有効であることも記録から明らかにされている。慢性疾患を持つ利用者に対する研究では、腎疾患、ALS、心疾患、呼吸器疾患など疾患固有の医療的処置が必要である中でどのような工夫や支援によって在宅療養が可能になったのか事例分析が行われていた。また、脳卒中ご自宅療養する利用者に対しては支援する看護師への聞き取りによって回復意欲や生活維持のための看護実践の方向性が検討されていた。

一方、看護師の看護実践や成長に関する研究はわずか 3 件であるが、看護師が在宅療養者の気持ちを汲み取る方法やどのように専門性を深めいったのかを明らかにする研究、さらに多くの葛藤を抱えながらどのように気持ちを支え合いながら就業を継続しているかを明らかにした研究が存在した。

表1 文献一覧

No.	研究テーマ	研究対象者	領域または疾患	データ収集方法
1	独居高齢者の療養生活に対する不安要因と生活支援の影響 -慢性腎不全の高齢者の退院に向けての支援-	利用者	慢性腎不全	半構成面接
2	在宅終末期筋萎縮性側索硬化症患者への入浴支援の方法と意義についての一考察	利用者・家族	ALS	経過記録 半構成面接
3	糖尿病を合併した重症心不全の患者が在宅療養でのセルフコントロールを可能にした要因	利用者	心不全	非構成面接
4	就労継続支援事業B型(作業所)に通所中の利用者の適応 -B氏のナラティブ(語り)を通して-	利用者	精神障害者	ナラティブアプローチ の記録
5	訪問看護における「病いの語り」 -利用者のナラティブを通して病いの体験に触れた1事例-	利用者	統合失調症	ナラティブアプローチ の記録
6	訪問看護師が感じた利用者の「もてる力」	利用者	統合失調症	半構成面接
7	離床への意欲を無くし、ほぼ終日床上で過ごす対象者との関わり ナラティブアプローチを用いて	利用者	心・呼吸器疾患	ナラティブアプローチ の記録
8	老年期精神疾患患者のQOL向上への援助 他科受診における自己決定を支援する	利用者	精神疾患	半構成面および スケール
9	精神科訪問看護利用者の家族が看護師に伝えたいこと -半構成的面接で家族が語ったこと-	利用者・家族	精神疾患	半構成面接
10	レビー小体型認知症療養者と家族の薬物療法に関するニーズ	利用者・家族	認知症	半構成面接
11	仮設住宅生活者への看護支援と女性たちのエンパワーメント	利用者	高齢被災者	非構造化面接 およびスケール
12	在宅がん終末期療養者の病いの体験 -重要他者との関わりを通じて自己の在り方の可能性にめがけて生きていくこと-	患者	がん終末期	非構成面接
13	触法精神障がい者の地域生活を守るケアマネジメントの効果 -言語化できなかったニーズに焦点をあてて-	利用者	精神障害者	経過記録
14	利用者家族が捉えた訪問看護 利用者の家族からのインタビュー・福祉職ケアマネジャーからのインタビューを通して	利用者・ケアマネジャー	高齢者	構成面接
15	地域で暮らす精神障がい者の老いの意識 精神障害をもちつつ地域生活を送る老年者の表現の分析と必要な援助	利用者	精神障害	訪問看護記録
16	精神科訪問看護における看護師の役割 -語ることに注目した事例から見えてきたもの-	利用者	精神疾患	訪問看護記録
17	終末期にある老年患者を看取るに至った家族の葛藤	遺族	がん終末期	非構成面接
18	訪問看護師に対する遺族の怒り	遺族	グリーフケア	非構成面接
19	弔問による遺族の「思い」から終末期を迎える家族への関わり	遺族	がん終末期	半構成面接
20	終末期療養者を在宅で看取った家族の介護肯定感 -末期がん患者を看取った家族のナラティブインタビューから-	遺族	がん終末期	非構成面接
21	遺族の語りにもみる訪問看護師の意思決定支援 -終末期がん療養者の介護プロセスにおけるケア内容との相互分析から-	遺族と訪問看護師	がん終末期	半構成面接
22	がん終末期患者の在宅看取りに関わる訪問看護師の体験 在宅での看取りを支えた訪問看護師の語りから	訪問看護師	がん終末期	半構成面接
23	“ゆだねる”境地に開かれて -山谷地域における訪問看護師の体験が照射する看護の本質-	訪問看護師・研修生	地域・精神看護	半構成面接

24	終末期在宅がん療養者を看取る決心をした家族への訪問看護師による家族看護実践	訪問看護師	がん終末期	半構成グループインタビュー
25	訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所従事者が、在宅高齢者終末期支援を行う上で経験する葛藤とその対処	訪問看護師	終末期	半構成グループインタビュー
26	当院における精神科訪問看護の現状と課題 -訪問看護に対する看護師と患者へのアンケート調査から-	訪問看護師・利用者	精神疾患	自由記載のアンケート
27	要介護高齢者の安全を守る訪問看護実践 -独居および日中独居高齢者に焦点をあてて-	訪問看護師	独居要介護高齢者	半構成面接
28	在宅における終末期患者の死亡確認の現状と特定看護師の役割 訪問看護師のインタビューから	訪問看護師	終末期患者	半構成面接
29	訪問看護師のとらえる臨死期における在宅終末期がん療養者の家族介護者の体験と支援に関する質的研究	訪問看護師	がん終末期	半構成面接
30	終末期における訪問看護師と多職種との連携を考える -多職種とのデスクカンファレンスを活用して-	訪問看護師と他職種	がん終末期	カンファレンス記録
31	在宅脳卒中障害者の機能回復意欲を促進する訪問看護	訪問看護師	脳卒中	半構成面接
32	訪問看護師が用いる在宅療養者の気持ちを汲み取る方法	訪問看護師	看護実践	半構成面接・参加観察
33	訪問看護師が実践に向かう気持ちを支える体験 -訪問看護ステーションのスタッフナースの語りから-	訪問看護師	看護実践	半構成面接
34	訪問看護の専門性を支える経験についての一考察 -熟練訪問看護師へのインタビューより-	訪問看護師	看護実践	半構成面接

4. 考察

訪問看護に関する研究は平成4年(1992年)に老人訪問看護制度が始り老人訪問看護ステーションが設立された12年後である2005年から出現し始めているものの年間2~4件と件数は極めて少ない。平成23年(2011年)の厚生労働省まとめによると訪問看護サービスが開始されてから利用者は増え続け、医療保険による利用者は約9,900人(増加率2.02)、介護保険による利用者は286,500人(増加率1.52)であり、約30万人が利用している⁽³⁾。この母集団に対し、実態を明らかにしうる件数とはいいがたいのが現状であろう。

さらにその内訳についてしてみると、医療保険での利用者の割合は神経系の難病が約25%、次いでパーキンソン病が15%と最も多く、今回がんの終末期と精神領域が最も取り上げられている領域であるがその利用者割合は、統合失調症が約12%、悪性新生物はや約10%となっている⁽⁴⁾。これは神経難病患者の訪問看護の利用希望は呼吸器管理や栄養管理、排泄の援助など家族では担えない医療処置を必要とする一方、がんの終末期や精神疾患では医療処置以外に利用者のみならず家族を含めた精神的援

助が必要であることが背景にあると考えられる。また、精神障害者においては就労支援や多職種との連携の必要性など多様な支援の在り方が必要になってくる。こうした個別性に応じた在宅療養を支えるために看護師は、事例ごとに異なる利用者のニーズを把握し、臨機応変な判断をする必要性や生命や個人の尊厳に関する倫理的判断も担わなければならない。したがって研究領域が困難を抱える二つの領域に偏る傾向があることは否めない。しかし、神経難病や要介護の利用者の訪問看護のありようや近年増えている小児の在宅療養者に関する研究は充分とはいいがたく、今後ますます各領域の特徴が明らかになるような研究が必要となっていくであろう。

基礎教育での在宅看護の位置づけを見ると、これまでの地域看護学から統合分野として位置づけられ「在宅看護論では地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し地域での看護の基礎を学ぶ内容とする。」と「地域で提供する看護を理解し、基礎的な技術を身につけ、他職種と協働する中での

看護の役割を理解する内容とする。」と指定規則に掲げられている⁽⁴⁾。すなわち、公衆衛生看護による健康の維持増進の部分と在宅看護として病院施設から継続して自宅で療養する人の援助として健康の回復や安寧な死までを担う在宅看護という幅広い看護活動を取り扱うという意味での統合分野であり、患者の生活、地域の文化や制度、多職種との連携の在り方などの知識を活用して複雑な看護を実践する分野として位置づけられている。こうした難しい判断を迫られる在宅での看護実践において看護師の判断過程、判断基準、看護の評価などはまだまだ明らかにおらず、今回の文献検討でも看護師を対象としてその判断や専門性の成長過程を分析したものはわずか3件であった。柳原らは、「在宅看護論での教育を抽象レベルではなく具体的に「体感できるような学習方略をとる必要がある」⁽⁵⁾としている。在宅看護が学問体系として構築されるためにも、在宅での現象や看護師の判断プロセスを掘り下げ、その本質を明らかにする質的研究は今後必須であると考えられる。

5. 参考文献

- (1) 厚生労働省 老健局 総務課：公的介護保険制度の現状と今後の役割 平成27年度、2017.6.5アクセス、
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/201602kaigohokentoha_2.pdf
- (2) 厚生労働省 HP：看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン平成27年3月31日通達、2017.6.5アクセス、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2016/11/15/1379378_04.pdf
- (3) 厚生労働省 HP：中央社会保険医療協議会第30回総会資料 平成23年11月11日、2017.6.5アクセス、
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200001uo3f-att/2r9852000001uo71.pdf>
- (4) 前掲(3)
- (5) 柳原 清子, 長谷部 史乃, 柳澤 尚代：在宅看護論教育のこれからの課題, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要第13号, pp. 69-74, 2000.

※以下表1記載の文献一覧に掲載

- (6) 秋庭 和世, 西村 弘子：独居高齢者の療養生活に対する不安要因と生活支援の影響-慢性腎不全の高齢者の退院に向けての支援-, 北海道看護研究学会集録, 平成28度, pp. 104-106, 2016.
- (7) 小口 富美江, 佐藤 明美, 大川 潤, 加藤 晴子：在宅終末期筋萎縮性側索硬化症患者への入浴支援の方法と意義についての一考察, 日本看護学会論文集, 在宅看護 46号, pp. 19-22, 2016.
- (8) 山下 久美子, 金地 昌枝, 白井 早苗, 高橋 育子：糖尿病を合併した重症心不全の患者が在宅療養でのセルフコントロールを可能にした要因, 香川県看護学会誌 6巻, pp. 1-4, 2015.
- (9) 石野 徳子, 金子 道子：就労継続支援事業B型(作業所)に通所中の利用者の適応-B氏のナラティブ(語り)を通して-, 日本適応看護理論研究会学術論文集, 8巻1号, pp. 129-131, 2011.
- (10) 白石 賢吾：訪問看護における「病いの語り」利用者のナラティブを通して病いの体験に触れた1事例, 日本精神科看護学会誌 53巻3号, pp. 248-252, 2010.
- (11) 濱田 淳子, 與那覇 五重：訪問看護師が感じた利用者の「もてる力」, 日本精神科看護学会誌 52巻2号, pp. 332-336, 2009.
- (12) 大西 さつき, 西谷 裕美子, 佐藤 智子, 太田 都, 伊澤 けい子：離床への意欲を無くし、ほぼ終日床上で過ごす対象者との関わり-ナラティブアプローチを用いて-, 公立八鹿病院誌 18号, pp. 61-63, 2009.
- (13) 八田 由利子：老年期精神疾患患者のQOL向上への援助-他科受診における自己決定を支援する-, 日本精神科看護学会誌, 51巻3号, pp. 392-396, 2008.
- (14) 與那覇 五重, 濱田 淳子, 野口 綾乃, 千葉 信子：精神科訪問看護利用者の家族が看護師に伝えたいこと-半構成的面接で家族が語ったこと-, 日本精神科看護学会誌, 50巻2号, pp. 548-552, 2007.
- (15) 湯本 晶代, 諏訪 さゆり：レビー小体型認知症療養者と家族の薬物療法に関するニーズ, 千葉看護学会会誌 19巻1号, pp. 19-26, 2013.

- (16) 作山 美智子, 庄子 弘子, 作山 佳菜子, 行方 暁子, 小野 八千代, 田中 聡美, 佐藤 幸子, 松井 匡治: 仮設住宅生活者への看護支援と女性たちのエンパワーメント, 東北文化学園大学看護学科紀要, 3 巻 1 号, pp. 35-44, 2014.
- (17) 松村 ちづか, 伊藤 和弘: 在宅がん終末期療養者の病いの体験-重要他者との関わりを通じて自己の在り方の可能性にめがけて生きていくこと-, 聖路加看護学会誌 16 巻 3 号, pp. 47-53, 2013.
- (18) 白石 賢吾: 触法精神障がい者の地域生活を守るケアマネジメントの効果-言語化できなかったニーズに焦点をあてて-, 日本精神科看護学会誌 51 巻 3 号, pp. 485-489, 2008.
- (19) 石川 徳子: 利用者家族が捉えた訪問看護 利用者の家族からのインタビュー・福祉職ケアマネジャーからのインタビューを通して, 家族看護学研究 17 巻 1 号, pp. 20-30, 2011.
- (20) 林 志摩: 地域で暮らす精神障がい者の老いの意識-精神障害をもちつつ地域生活を送る老年者の表現の分析と必要な援助-, 日本精神科看護学術集会誌 56 巻 1, pp. 334-335, 2013.
- (21) 浅倉 由紀, 鎌田 聖一: 精神科訪問看護における看護師の役割-語ることに注目した事例から見えてきたもの-, 日本精神科看護学術集会誌 55 巻 1 号, pp. 1198-1199, 2012.
- (22) 坂口 千鶴: 終末期にある老年患者を看取るに至った家族の葛藤, 日本赤十字看護学会誌 10 巻 2 号, pp. 19-26, 2010.
- (23) 小林 尚司: 訪問看護師に対する遺族の怒り, 日本赤十字豊田看護大学紀要 5 巻 1 号, pp. 19-26, 2010.
- (24) 首藤 悦子, 松岡 千恵子, 齋藤 由美: 弔問による遺族の「思い」から終末期を迎える家族への関わり, 済生会下関総合病院看護部院内看護研究集録 2008, pp. 61-66, 2008.
- (25) 井ノ上 梢, 上川 視紀子, 荒牧 良枝, 松川 美鶴, 高木 幸代: 終末期療養者を在宅で看取った家族の介護肯定感-末期がん患者を看取った家族のナラティブインタビューから-, 日本看護学会論文集 地域看護 36 巻, pp. 227-229, 2006.
- (26) 古瀬 みどり, 宮林 香奈子: 遺族の語りにおける訪問看護師の意思決定支援-終末期がん療養者の介護プロセスにおけるケア内容との相互分析から-, ホスピスケアと在宅ケア, 22 巻 3 号, pp. 312-317, 2014.
- (27) 坂本 知寿: がん終末期患者の在宅看取りに関わる訪問看護師の体験-在宅での看取りを支えた訪問看護師の語りから-, 神奈川県立がんセンター看護師自治会看護研究部会看護研究集録 20 号, pp. 54-73, 2014.
- (28) 津田 哲也, 川喜田 晶子, 宮本 真巳: “ゆだねる”境地に開かれて-山谷地域における訪問看護師の体験が照射する看護の本質-, 精神科看護 40 巻 7 号, pp. 048-057, 2013.
- (29) 山村 江美子, 長澤 久美子, 蒔田 寛子, 富安 眞理: 終末期在宅がん療養者を看取る決心 実践, せいい看護学会誌 4 巻号, pp. 1-5, 2013.
- (30) 松井 妙子, 鳥海 直海, 西川 勝: 訪問看護, 訪問介護, 居宅介護支援事業所従事者が, 在宅高齢者終末期支援を行う上で経験する葛藤とその対処-チーム活動に関するグループインタビューの現象学的分析から-, 香川大学看護学雑誌 17 巻 1 号, pp. 11-24, 2013.
- (31) 有谷 金子, 常盤 祥子, 森山 章子, 熊谷 紀美子, 市ノ川 さとみ: 当院における精神科訪問看護の現状と課題-訪問看護に対する看護者と患者へのアンケート調査から-, 日本精神科看護学術集会誌 55 巻 1 号, pp. 200-201, 2012.
- (32) 小枝 美由紀: 要介護高齢者の安全を守る訪問看護実践-独居および日中独居高齢者に焦点をあてて-, 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 23 巻, pp. 131-140, 2016.
- (33) 長谷川 健美, 高野 政子, 市瀬 孝道: 在宅における終末期患者の死亡確認の現状と特定看護師の役割 訪問看護師のインタビューから, 看護科学研究, 14 巻 1 号, pp. 1-10, 2016.
- (34) 齋木 千尋, 伊藤 絵梨子, 田高 悦子, 有本 梓, 大河内 彩子, 白谷 佳恵, 臺 有桂: 訪問看護師のとらえる臨死期における在宅終末期がん療養者の家族介護者の体験と支援に関する質的研究, 日本地域看護学会誌 18 巻 1 号, pp. 56-64, 2015.
- (35) 佐野 千恵, 平尾 由香里, 吉野 深雪: 終末期における訪問看護師と多職種との連携を考える-多職種とのデスカンファレンスを活用して-, 日本看護学会論文集 在宅看護 45 号, pp. 71-74, 2015.

- (36) 千田 みゆき : 在宅脳卒中障害者の機能回復意欲を促進する訪問看護, 保健の科学 47 巻 4 号, pp. 307-312, 2005.
- (37) 島村 敦子, 辻村 真由子, 諏訪 さゆり: 訪問看護師が用いる在宅療養者の気持ちを汲み取る方法, 千葉大学大学院看護学研究科紀要 35 号, pp. 1-8, 2013.
- (38) 白柿 奈保: 訪問看護師が実践に向かう気持ちを支える体験-訪問看護ステーションのスタッフナースの語りから, 日本赤十字看護大学紀要, 24 号, pp. 87-95, 2010.
- (39) 栗谷 とし子, 吾郷 ゆかり: 訪問看護の専門性を支える経験についての一考察 熟練訪問看護師へのインタビューより, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 5 巻, pp. 111-122, 2011.